

日本における子育て相互支援文化の形成過程(1)

「みしまプレイセンター」の進歩と進化

久保田 力 (浜松大学/日本プレイセンター研究会)

(((本研究の意図)))

久保田はこれまでに、日本保育学会/年次研究大会における個人研究発表・自主シンポジウム・課題研究シンポジウム、あるいは、各種論述の機会に、何度となくくり返し **New Zealand** の **Playcentre** を紹介し、約60年の間そこで展開され続けている「保護者自身によるお互いの子どもの預かりっこ・預けっこ」を典型的な事例とする《子育ての相互支援》活動について、日本における「子育て支援」政策の具体的展開過程との比較から、その意義などを論じてきた。

と同時に、久保田はまた、静岡県東部エリア(三島市・沼津市・駿東郡・田方郡)に居住する保護者たちとの協働により、**Families growing together** (一緒に成長し合う家族)という **Playcentre** の基本理念を正しく踏襲する「日本版プレイセンター(具体的には《みしまプレイセンター》)」活動の形成過程 および育成活動に、研究者としてではなくむしろ、子育て相互支援サークルの一人の男性メンバーとして、深く関わり続けてきた。

ここ数年間にわたる、上述の「子育て相互支援」実践活動を通して久保田が最も感じ、また、危惧するのは、とりわけ若い世代の父親や母親の間に拡大している、あまりにも強い「やっってもら」意識、または、「してもらえる」感覚である。換言すれば、子育ては「支援してもらうのが当然」とも言いたげな父母が多いという事である。

国・都道府県・市町村から提供される各種サービスへの不平や不満は呈するが、それを改善する/改善させる自主的・自発的なアクションを起こして活動する、ましてや、「足りない部分は自分たちで補おう!」という創造的活動の展開となるとそれは、極めて稀な事例という事になってしまうのではないだろうか。

少子社会化に対する国家の緊急対策的政策としての「子育て支援」は、おそらく、今後ますますその展開の速度や内容を増していくのだろう。

しかし、それがいくら推し進められたとしても、父母あるいは保護者という極めて重要な社会的役割を担うべき世代に、「父親・母親を務める」という明確な自覚や「子育て」に対する自己責任意識を持たせるという方向性を見失っていたのでは、結局、「一時しのぎの(子育てや

保育の質を不問にした)人口増加政策」としか評価されなくなるのではなからうか。

「子育て支援」とは、「父母たちの子育てを(彼らにとって都合がいいように)支援する」事ではなく、「父母たちが自己能力最高レベルでの子育てを展開できるよう支援する」事ではなかったのか?

そして、「子育て支援」研究には、その具体的な展開方法を事例研究や実践研究や調査研究などのアプローチで探るといふ知的作業だけではなく、(もち論、将来のという意味も含め)父母あるいは保護者たちに「何を伝え・何を身につけさせるか」についての理念的(哲学的・思想的)探究活動が必要とされているのではないか?

上述の問題意識に立ち、久保田はこれまでの事例研究的性格を強くもつ **Playcentre** 研究を離れ、次世代の父母あるいは保護者たちに対する教育のあり方に関し、**New Zealand** での子育て実践事例からこれまでに学んできた「相互支援文化(預かりっこ・預けっこ)」という視点からの継続的考察を続けたいと考えている。

(((本発表の具体的内容)))

日本保育学会 第57回大会(兵庫)における報告では、わが国のこれまでの「子育て支援」政策が有する問題点に基づきながら、① 本研究における基本的問題意識を再整理して提示する ② 「みしまプレイセンター」における四年間の活動の中から見出せる父母や保護者たちの精神構造の一端を提示する ③ 「みしまプレイセンター」に参加する保護者たちの成長過程を、「子育ての相互支援」文化(発想/精神構想)という視点から時系列的に整理し、具体的事例とともに提示する ④ 本研究における今後の課題や方向性について提示する。

(((お願い)))

「みしまプレイセンター」の2003年度の活動は、本原稿提出時においても継続中であるため、現時点では、これ以上の具体的資料を提示する事ができない。

2004年3月末日までの活動に基づく論稿や資料は、当日の発表用としてまとめさせていただきたい。

(((情報)))

学会発表

- ・「New Zealand/Playcentre における父母の自己学習プログラム」, 平成9年5月, 日本保育学会 第50回大会
- ・「テ・ファリキ/Te Whariki (New Zealand の統合的就学前カリキュラム)と Playcentre」, 平成12年6月, 日本ニュージーランド学会 第7回研究大会
- ・「New Zealand の Playcentre および Te Whariki が示唆するわが国における保育士養成の新たな課題」, 平成12年10月, 全国保育士養成協議会研究大会 (福岡県)
- ・「New Zealand の Playcentre における保護者たちの自主的学習会プログラム」, 平成12年11月, 日本生涯教育学会 第21回大会
- ・「わが国における Playcentre 活動の先行的試図: 「ふじやまママ」プレイセンターの活動報告」, 平成13年5月, 日本保育学会第54回大会
- ・「わが国における Playcentre 活動の先行的試図(2): 「中郷文化プラザ」プレイセンターの活動報告」, 平成14年5月, 日本保育学会 第55回大会
- ・「準備委員会企画シンポジウム/ユニークな実践活動を通して「保育の多様なあり方」を再考する: プレイセンター・認可外保育所・プレーパーク等から何を学び得るか」, 平成15年5月, 日本保育学会第56回大会

論文など

- ・ Playcentre/New Zealand における就学前教育活動に関する The Education Review Office (教育評価局) の教育経営評価, 平成11年12月, 常葉学園短期大学紀要 第30号, pp.171-194.
- ・ Playcentre における保護者たちの協働的「ペアレンティング (parenting)」学習プログラム, 平成11年12月, 日本ニュージーランド学会誌 第6巻, pp.29-40.
- ・ New Zealand 型幼保一元化と Te Whariki (統合的就学前教育課程): 幼稚園教育要領および保育所保育指針の内容的統合に対する示唆, 平成12年12月, 常葉学園短期大学紀要 第31号, pp.75-85.
- ・ わが国における Playcentre 活動の先行的試み, 平成13年6月, 日本ニュージーランド学会誌 第8巻, pp.12-18.
- ・ New Zealand の Playcentre における保護者の自主学習プログラム: Te Whariki (統合的就学前教育課程)との関わりにおいて, 平成13年7月, 日本生涯教育学会論集22, pp.165-172.
- ・ Playcentre および Kohanga Reo における異文化理解教育, 平成14年8月, 日本ニュージーランド学会誌 第9巻, pp.16-21.

その他

大場幸夫/編集代表, 『育つ・ひろがる子育て支援』, スペース新社, 平成15年6月

(以下余白)